

河
の
お
も
て

モ
オ
ハ
ツ
サ
ン

河のかよて (モオパッサン)

私は、^{昨年}昨日の夏、パリからニ三マイル

へだてたセーヌ河の堤上りあり、一軒のちい

さな田舎家を借りつけ、夜はそこへ行つて

眠らうことにしてゐた。二三日のうち、私

は、近くに住む一人の男と懇意になつた。

三十歳から四十歳の向の男で、今までは金づ

たこともないぶつた、奇妙な型上の人物だ。

た。老練な漕ぎ手で、漕ぐことにかけるは、氣

ちがいにみ^くほいと夢中。四六時中水の近づく、

水の上に、いや水の中に住んでいゝといふ人

物。きつとボートの中で水をたに相違なく、

やがてはぬきずボートの中で死^ぬぬくことだ

ろく。

あゝ晩、^{二人は}、セー又何かおんいれ敬貴

いゝつたが、新は徳り、水上生活でなつかお

と^{かん}ろ^{かん}話はやいかと訊いた。さるところの^好

^{人物}は、にわか^いに^いは^いは^いし、^{形相}を^変

曰漁師にとつては、陸は有限のものと思

われています。だが、月のない暗い晩には、

河は無限だと思われるのである。水夫達は、

こんな感情を、海に對してもつてはいません。

海は、^{地中海などは、}~~地中海などは、~~ ^{困りもので}時おりは~~波多き海~~ ^{波多き海}もあるし、

邪慳なまぬかしさを。でも、そんな場合、海

はほいたり~~野~~あめいたりして、正々堂々と

振舞います。ところが河は、だんまり~~の~~ ^の

重なり屋をうんである。河はブスツともいってません。

いつと静かに流れていくのである。しめりくの

永遠の川に流れる水の動きは、

（サ荒海）
激しい動きをする

多量の水を降らすりも、おつと遠かに恐ろしいと

のちよんでこと。

曰夢想家は、海はその胸に、偉大な世界

を秘め、そこに溺れた人々は、ふしぎな木村や

水晶の洞の^{（はく）}を^{（た）}ころつく、巨大な魚の向を、

前後左右にころがるをんでくとき、言い立て

まこと。海が、河は、ただ、粘土の中に人が腐

り果ててつる、黒いどん底を叩きだけてこと。

まあまあ河のまみしいのは、曇り出した川の輝や

いさよやわりのかゝる聲でささやく物語は、荒海の
の咆哮が語る凄惨な戯曲よりも、なまおずつと
不吉になけりやういと、考へるのである。

口でこそが、あつたは、私の思い出話を聞き
たいと ~~き~~聞かされる。だから、私の十年は
のり前にここで出くわした、ふしぎな事件の
お話をしましようかな。

口その頃も今とおなじに、私は、ラフオン

おばさんの家に住んでいました。そしてルイ・ベ

ルネーという、^人最も親しい同窓の友も、^{ここ}義

かぶニリーグ下の^下のC村に住んでいました。こ

の男は今では文官勤務をしてるので、^{オール}機を

とることも、踵の低い靴も、袖ましの運動シ

ヤツも着てていままでおぬ。二人は毎日のよう

に、いつしよん食事しましん——時には、彼

の家^方で、時にはおの方で。

コある^{目処}、私は一人で、おなり停水て家

に^{かけこ}戻り^いました。
おなり^{おなり}停水て^{おなり}家^{おなり}に^{おなり}戻り^いました。

ウンクン
おなり^{おなり}停水て^{おなり}家^{おなり}に^{おなり}戻り^いました。
十二^{おなり}時^{おなり}も^{おなり}あ^{おなり}る^{おなり}や^{おなり}つ^{おなり}で^{おなり}、^{おなり}いつ^{おなり}も

夜^{おなり}更^{おなり}る^{おなり}ま^{おなり}め^{おなり}て^{おなり}ワ^{おなり}に^{おなり}ホ^{おなり}ー^{おなり}ト^{おなり}な^{おなり}ん^{おなり}で^{おなり}は^{おなり}。おなりは^{おなり}ど^{おなり}っ

コボートは流勢（ま）に押されて、ピンと錨（の鎖）を

張り、グツことまります。新は艦（と）に敷い

た羊皮の上（多）に、のびのびと坐り（み）

ました。なんの音もしません——シンと

いまして。ただ、ときどき低い、ほとんど聞き

とれないほどの、山にみたみたする水音が耳

にフクフクいでした。そしていつち、（象） 藪（象）

羨りの、ととれ丈（お）の高いのが、ふと奴を形に

見えそ来て、折れぬれ（象）と動いてつるよう

に思われ（ま）ました。

口何はまったく静かでした。あたりのあま

りの静かさを、むしろ気味わるく感じるほど

でした。すべての動物——蛙や草虫や、^す洲の夜

の歌手達——は、^み沈黙してしまいました。ただしぬ

けれ、^右右手で、^左左手で、^近近く、一匹の蛙が、^ううな

なよりの鳴きました。私はキョツとしました。

蛙は沈黙しました。それ^ままに聞えな

ので氣を衰へるため、私はちよつと煙草を

ふかそうとしました。私は、いわば、パイプ

の常中用者ではありませんが、その晩は喫む氣

これの山岸のあたりからホー
トをぶっつけたので

になりませんでした。二服ふかしませんが、

胸があるくなつたのでやめました。私は口の

中で呼吸をさうたいたました。聲のひびきか

らなつたので、ホートの底の身まのはし、空

をなめました。しばらく私はジツとしい

ました。か、そのうち、ホートがさくし動揺

したので、不安になりました。私は

はじめ

進路をあたったの ~~と~~ 思いました。それか

ではないか

ら、なりの感^じ存在、なりの目^め見えな^い力

が、ホートを水底へ、そろりそろり引^ひつ^たり

はちよくな気がぬきました。——と、ボートは、

つかいて引き込まれる直前触水のように、た

だホカリとほきあまりました。私は嵐のまつ

たれ中にといるように、
~~揺りまわされ~~ ^{揺りまわされ} 揺りまわされまし

た。私はぐろり一転、駭ゆい物音を聞き

ました。急な飛び起き、
~~揺りまわす~~ ^{揺りまわす} 揺りまわすすぐに坐り ^{直し}

ました。水は泡立っています、
~~ゆめ~~ ^{ゆめ} ゆめ、ほろのしもの

はすくて静かでした。

曰 ^{どう} 神 ^か 経 ^か 読 ^か つきませくので、出 ^で の ^け ^る ^{こと}

いして、錨の鎖を引っ張りました。ボートは

動きました。すると私は手袋えを感じました
 ので、更に強く鎖を引きました。錨は~~何~~^何底の
 なりにひつのかつていりしく、あがつて
 来ません。引きあげることもできません。ま
 たウンと引つ張つたが——駄目。オールでボ
 ートを上流の方へ廻りし、錨の位置を変え
 ようとしたのでよめ、それも役にたらず、錨
 はそのままびくともしない。私は~~無~~^無病癢を起
 しました。むかつ股をきめて、鎖を緩ゆすぶ
 りました。まるで動きません。錨こめが私の手業で

しめ

舟の方向

そんないなか
待たないで

は、鎖を切る望みも、ゆるめる望みもありま

せん。というのは、鎖は大変重く、
舟の

腕より太い横木に鎖締めになつてつたので

です。だが、天気はずつとよい事なので、私は、

誰か医師が救いに来てくれさうだと、

たかそくくつていました。これは自分の仕で

か、
私は氣を落ちつけて坐りこみ

今こそ一服すべきでした。ブランチイを

ひと瓶もつていたので、二三杯あほりつけ、

自分のこの境界を苦笑しました。ひどく目者

い晩でしたので、必要とすれば、別に困るこ
ともなく、星の下でその夜を過ごしたつていい
おけでした。

「だしのぬけれ、ボートの舷へら、ゴツ軽くゴツた

たく音おしました。おぼろがヨツとしたお曇りの

頭から足まで凍りつき、冷汗が凍りつきまし

た。音は、疑うべくもなく、何の流勢りゅうせいで抜けた本

片から起ったのでした。それにさかいたなかっ

たのでした。おは、またも、ふしぎな神経

の激動に言い物ものたのでした。いかいられ鎖をつかむなり、

釣は、意地なふつて、死物狂いに引つ張りま
しん。釣は動のふいまままでと。力まきて釣
はドカンと坐りくみましん。

□そのうち、さうしあつ、河はいのりも濃

い白い霧で蔽われましん。霧は水面を低く

しん。ましんので、立ちあがった釣の目には、流

れは無論のこと、足もボートも、もう見え

なくなり、ただ丈高のな岩の先だけが見

えましん。岩のゆるは、

まっ青な月、大きき黒い

動しましん。狼狽のあまり、泳いで逃げよう

かと考えました。その瞬間、

この自分の考え

に、おぼいてブルツと震えたのでしん。

——
夢

（中に）
おぼえてなつて、このおぬけのことのできない

おぼの中と、ここかしこ清流漂う。長い草や

蒼蒼の間と、
（よ）
けることとできないうで、

（よ）
おぼのたため喉は鳴きかしの如ら、

もかきすあう。岸も見えなければ、ボートも

わかりなくなる。すると、ちんがの、足さつ

（四）

かまぬて、暗い水の底へ引つ張りこまれるよ

断行一字サク

曰私は ^{人別で自分を} 自分自身を ^{押しよ} 押えようとした。

私は自分の意志 ^で、恐怖 ^を しつめりと ^断断

^{こやろ}せ ^多多 ^美美 ^とと ^しし ^まま ^しし ^んん。しかし、そこには意志以

外のちんかがありました。それが心配の種で

した。私は、^中中 ^をを ^一一 ^體體 ^をを ^心心 ^ろろ ^しし ^かか ^つつ

ていつのか、^自自 ^分分 ^のの、

勇 ^気気 ^とと ^臆臆 ^病病 ^とと ^区区 ^切切 ^つつ

いるものは、果してないかと、自問してみよ

また、^自自 ^分分 ^のの ^心心 ^をを ^押押 ^ええ ^よよ ^うう ^とと ^しし ^まま ^しし ^んん

^ああ ^らら ^のの ^心心 ^をを ^押押 ^ええ ^よよ ^うう ^とと ^しし ^まま ^しし ^んん

よくやるように、水の足踏むあかろくと企て
たら、それだけのことと、私は真仰向けに
ひっくりめえつて、氣絶したにちいさいと
思われるほどでした。

「^{だが}、^{それでも}、非常な努力をして、とろとろ私

は、一旦失^{いかげ}った理性を、ほとんど恢復しまし

た。まゝフランドイの瓶をつかんで、~~水~~がブ

がブ呷^{あな}りつけました。その時、~~水~~心^いん思^いつ

て、私は~~水~~聲^いのかきり叫^いびはじめました。~~水~~水

平線の四方八方へ、つちけおまね叫んだので

した。喉がまっただよみしびれてしまった時、私
は耳を^はしましましん。遠く^は響く音が、犬が咆え
まゝん——遠い彼方で。

「^{ころりと}また私は両を甲りました。ホート

の底で仰向けに^{ころりと}ましました。そんなふう
に、^{あやうく}一時は、いや二時間も、私は^{長い}恐怖の

る恐怖に包圍されるので、目を大きく^ま睜つて

眠りもやがた、ジツと^いましました。私は

起きあがり^いませんでした。し

かも私は^{ヤサ}自棄気味でそつたのでした。私は

まきまき わずかなよき目とさ
せりふのことに ^{いのち} 生念かけ
どもあるように

おは、
目を向けることでも
まきまき ようやく

たえむこの心持を ^{まきまき} 押しつけ

あ！ ^{まきまき} フ！ と、おは自分の言うつもり

でした。か、おは身動きささる ^{まきまき} 気がなれ

ませんでした。とろとろ ^{はやく} おは非常に用心して

起きあがりました。まきまき ささるボードのそ

とをのぞいて見ました。

「おはまきまき 宝に驚くべき光景に、

クラクラッとしました。それはまきまきで、妖精

の園からの幻燈のようでした。それは遠い遠い

園から帰って来た旅人の口から話されたよ

うな、さうと聞いても信じ得ないよるを幻景
の一つまでした。

二時向前三河面を蔽い曇つていた霧は、

次第に引き曇りて、堤の上にくさ高く重なり

ました。まつたくきれいな河面を去つた霧は、

兩岸に六七メートルの高きもの、長い低い丘

をつくつていまして、月光のもと

に、雪のようになつていまして。ですから、

この二列の白い山をみから流れる下る河の間

あまのほかれは、きにも見えなかつたのです。

そして、
その頭上高く、すばらしい大
きさの満月が、青い、乳色の空にゆたやとあふわ
しそいました。

水の中のあゆむ生物は目をさましました。

蒼空は強くよりに鳴きたてました。一方たえず、

右手のと思えぬ左手に、
五月 虹が日生

に向つて放つ靨面を、真鍮のような音が、

穏かく物心しく半調にひびくのが聞えました。

まったくあしきなこと、
てすが 私はもう四回もく

をりました。
私は、
まっ

あつちのことはでき
ません。
——

でしまいました。それゆゑ、震えまがら、蒼

のそよぎや河の不吉らしい物事の厚を隠まし

ました。

私はあたりを、見ようとしました。だが、

私は自分の乗つてゐるボートも、いやな自分

の両手すらも、その手を目のそばまであげた

のでした。

「しかし、勝要の濃さはそこしつた薄さ

がましん。思いがけず、一つの物の影に、私

のそばを滑つてゆくように感じました。私

か 叫びをあげると、一つの聲が應え響——そ

れは漁師でしん。

~~おおいと~~

叫ぶと鐘は近の響

つて来すん。ワで、おはくの災難を告げま

ん。漁師は自分のボートを横おけにして、お

といつしよれ鐘を、引き揚げにのりま

しん 鐘は動きませんでしん。そのうち鐘が

あけましん。陰氣な灰色の雨もよいの寒

日——^{つねに}悲しみと不幸をもちらすよるを、そん

な日 ^{とびえたのこし}おはもろ一艘船を見おけ

たので、二人で叫びとめましん。その船頭も

あれあれに力を貸してくれました。そこで鎖

は、さくしおつ動きました。鎖はゆつゆつ

ゆりゆりして来ましたが、なかなかひどく重い

ものが、下めい引つつつ浮つきつよつうつでつした。とくとと

あれあれは、一つの黒い塊をめい目つにしたの

で、それを船側へ引き寄せました。

可——それは、頭めいのつ石つをく

くりつけられた、一人のぼんぼんの辰めいなつので

した。